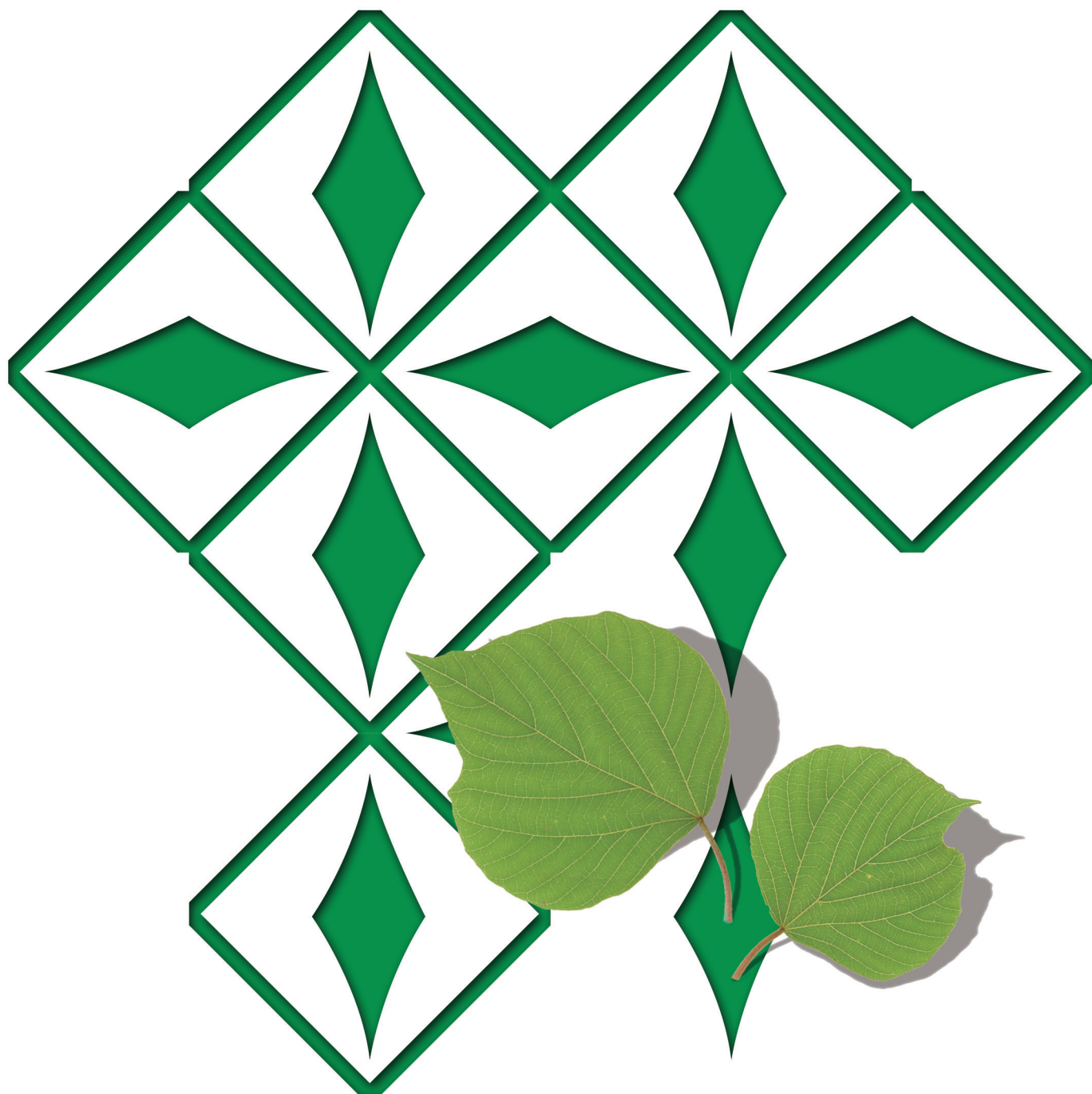




AJCクリエイターズコンテスト2017

財団後援事業

3月22日～27日 東京都美術館にて
主催：AJCクリエイターズコンテスト実行委員会



全員でカメラに向かって乾杯！



好きなことを極める方々にエールを送った財団・佐藤(右端)。



表彰式の冒頭で挨拶をするコンテスト実行委員会会長の江幡哲也氏。

財団が後援し、協賛会員の株式会社アバウトライフワークスが事務局を運営する「AJCクリエイターズコンテスト2017」が、3月22日～27日まで東京・上野の東京都美術館にて開催された。10回目となる今年は、総エントリー数722点、出品数194点、来場者数1169人と盛況だった。会期中の26日(日)にはギャラリートークが、また上野精養軒にて表彰式とレセプションが行われた。昨年同様に銀賞が生涯学習開発財団賞となり、理事長代理として事業部長・佐藤梨奈が受賞者に表彰状を授与した。今年の大賞(内閣総理大臣賞)は、昨年銀賞だったJunko・trois氏が、アートジュエリー作品「軍鶏」で受賞した。

AJC (Arts Japan Crafts) は、英国で19世紀に起きた「アーツ&クラフツ運動」に由来する。日本のクラフト作家たちの育成と奨励、社会的認知度と芸術度を高めることを目的にコンテストを開催してきた。江幡哲也会長は表彰式冒頭の挨拶で、「東京都美術館からも高い評価を受けており、来年以降も契約更新され、今よりも良いフロアーにて開催される運びになった」と報告した。

〈銀賞〉生涯学習開発財団賞



工藤嘉子氏
(表彰式ご欠席)
アートジュエリー部門
「陽月華鳥シリーズ～鳳翼～」

〈金賞〉厚生労働大臣奨励賞



古山文子氏
ファブリックアート部門
「夕日影」

〈金賞〉文部科学大臣賞



田中早苗氏
人形部門
「うずら」

〈大賞〉内閣総理大臣賞



Junko. trois氏
アートジュエリー部門
「軍鶏」



〈銀賞〉生涯学習開発財団賞



貝藤和美氏
(代理人受賞)
フラワーアート部門
「羊のいる情景」



〈銀賞〉生涯学習開発財団賞



山下じじ氏
ファブリックアート部門
「モンスーン・ウェディング」



〈銀賞〉生涯学習開発財団賞



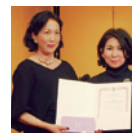
水摩明子氏
アートジュエリー部門
「花浴み」



〈銀賞〉生涯学習開発財団賞



新田佳子氏
アートジュエリー部門
「五色霜林」



47歳の遅いスタートから、独自の技を持つ工芸作家に

「早春」
(2015年)

「春摘み」(2004年)

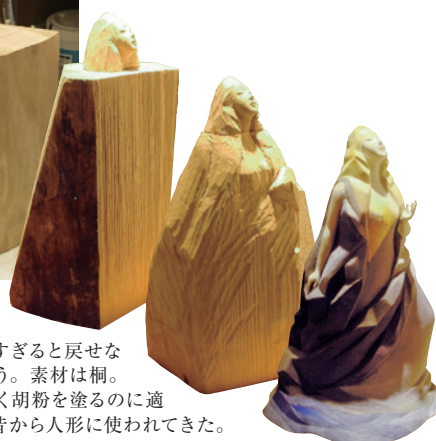
人形
岩田宏子

Iwata Hiroko

- 1942年 山口県に生まれる
 1989年 木彫人形制作を始める(芹川英子門下生)
 1992年 伝統工芸人形展 初入選
 1995年 日本伝統工芸展 初入選
 1996年 アメリカ・カリフォルニア州 Hakone Garden
 Garellにて作品展示
 1997年 アメリカ・カリフォルニア州 Foot Hill Colledgeにて
 作品展示とレクチャー
 1997年 ハンガリー・ブタペストにてグループ展
 2005年 日本とEUの民間文化交流の一環として
 オーストリア・ウィーンの日本大使館にて作品展示
 2004年 第22回伝統工芸人形展にて日本工芸会賞受賞
 2008年 第24回伝統工芸人形展にて日本工芸会賞受賞
 現在 日本工芸会正会員



木彫人形は削りすぎると戻せない
 いので神経を使う。素材は桐。
 桐は脂分が少なく胡粉を塗るのに適
 しているため、昔から人形に使われてきた。



聞き手:上野由美子(右)

古代オリエントガラス研究家。UCL(ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン)考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年~2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切り装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

結婚。3人の子育てで絵からは離れていました。その頃、母がお友達と集まって木目込人形を作っていて、実家に帰ると仲間に入れてもらってたんです。先生に勧められ、教室で教えたりのしていました。そんな中、

人形を始めたのは遅かったそうですが、絵が好きで、大学は美大に行きたかったのですが親は反対でした。それでも熱意に負けて、東京藝大に受かるならと受験を許されましたが、奇跡的に二次試験まで通ったところで連れ戻されてしまいました。戦時中生まれという時代背景もあって、国家資格をとりなさいと医学検査技師の学校に行かされ、資格を取りましたが23歳で

— 今にも動き出しそうな、そして楽器の音色が聞こえてきそうな、そんな印象を抱く、岩田宏子さんの木彫人形。本格的な人形制作は、5歳で芹川英子門下生となつてからだ。遅いスタートにもかかわらず、資質をみごとに磨き、伝統工芸人形展や日本伝統工芸展ではたびたび入賞するほか、海外でも高く評価されている。

創作展で受賞を重ねるうちに、「岩田さん、これだけ作れるんだったら伝統工芸をやってみては？」と勧められたのがきっかけです。その世界のことをまったく知らないまま、その方が連れてって紹介してくださったのが、第一人者の芹川英子先生だったのです。それが1989年、47歳のときでした。

私の場合、人との出会いが作品作りに影響を及ぼしています。芹川先生もそうですし、2000年の秋山信子先生との出会いも大きかったです。重要無形文化財保持者の秋山先生を講師とした文化庁主催の研修会に参加できるといふ貴重な機会をいただき、乾漆について指導を受けました。

——岩田さんは木彫人形を得意としていますね。

自分に立体ができるのかと心配しましたけど、デッサンをしていたお陰か、あまり抵抗なく木を彫る事ができました。木を彫っていることがとても心地良くて、そのまま自然と続けて今に至っています。

一般的には、木彫人形は頭、胴体、手足を別々に彫ることが多く、私もより柔らかな線を出すために、その方法で作るときもありますが、基本的には、丸太の断片から、頭、顔、手足、胴体と一体となった形で彫っています。まずデッサンに基づき全体を彫りあげ、次に時間をかけて、細かい所を納得がいくまでじっくりと彫っていきます。

——衣裳や顔はどうされているのですか。

形ができあがると表面に胡粉（こふん）を塗り重ねます。肌の色を出すと同時に、胴体の木地を引き締め、崩れやひび割れ防止にもつながります。その上に衣裳を貼っていきま



「秋響」(1999年)



「チューニング」(2002年)



「祈り」(1993年)

の両方を使って仕上げることもあります。顔や髪の毛は、面相筆で描き込みます。

着物や端切れを集めているのですが、昔の布は手に入りにくいのが悩みです。和物の人形は、時代や職業、年齢、既婚か未婚かによって、着物の形、柄、帯の結び方などが細かく決まっているのです。思った模様がなければ、布に糸をはめ込んで独自の柄を作ることもあります。本音を言えば、あまり細かいことを気にせずもっと自由に表現してもいいのではと思うこともあり、最近新しい作風に取り組むこともあります。

——海外で受けた影響も大きいそうですね。

夫のアメリカ赴任に同行した際、裸体デッサンをやりたいとカレッジに申し込んだんです。最初断られたのですが、作品を見せたら即OKになり、「授業料も要りません」と言われました。裸体デッサンのモデルも老若男女で、芸術に対する自由な感覚は学びましたね。その姉妹校の先生から、作品を飾って講義をしてほしいと依頼をされ、学生の助けを借りて英語で講義をしました。日本では無名なのに満席で、貴重な体験でした。

娘がドイツで音楽をやっている関係で、ヨーロッパにも友人が多く、みんな「日本の文化は素晴らしい」と言ってくださり、スイスやモナコの方が作品を買ってくださるなど、日本の工芸は国内よりも海外の方が高く評価される印象です。

——継承という点では難しさもあるようですが。

ぜひ新しい感覚の若い方に入ってきてほしいと思っています。ただ、胡粉やニカワを扱う地味な作業を何度も繰り返ししたり、どの工程も根気と経験が必要です。すぐには上手くなりませんから、好きでないと続かないんですね。それでも一作ごとに、表現することの楽しさと難しさを感じつつ、次は……との思いが継続の力になっているように思います。

相手も自分も笑顔にできる、ずっと続けたい素敵なお仕事

■このままの人生でいいの?

宮崎有未さんの人生の転機は、東日本大震災だった。大学を出て金融関係の大手企業に就職し、12年間営業職で活躍。震災当時は転職していたが、その企業でも役員秘書を務めるなど、会社員としては充実したキャリアを積んでいたように見える。しかし、内面にくすぶっていた熱い思いが、大震災によって揺さぶられたのだ。

「このままの人生でいいの? 自分の可能性を試したいという思いが湧いてきて、レールを乗り換えようとスパッと会社を辞めました。といっても、やりたいことがあったわけじゃないんです。自分に何ができるの? 私は何が好きなの? と自分を問い直す中で、イメージコンサルタントって何? と、知らないから気になるという出会いでした。以前にカラーセラピーを学んで色に興味があったこともあり、まずは行ってみよう! と」。

■ビジネスシーンと男性に強いのが特徴

イメージコンサルタントとは、簡単に言えば印象・イメージの専門家。ファッションやメイク、色彩の側面から、その人の「似合う」を導くとともに、社会に対しての「与えたい印象」や求められている役割のイメージに到達する。それが「イメージを創る」ということ。視覚から入る印象の8割は色に影響されるため、一人一人の肌・髪・瞳に調和するパーソナルカラーの分析から、骨格・体型分析、イメージに合わせたメイク、似合う服や着こなしまで、指導できるスキルを身につけていく。

ビジネスシーンや男性のイメージ創りに強いのが当

イメージコンサルタント

宮崎有未さん

色に触れるのが楽しくて、電車で移動中にもずっとカラーカードをめくっていたという宮崎さん。指導する立場になった今も、色に触れているだけでリラックス効果があり、思わぬハッピーが次々と起きる。そして自分が磨かれ自信がつき、前向きになれるのだという。



協会の当資格の特徴で、経営者、政治家、著述家、講師などからの依頼も多い。服を買うのが得意な男性も多く、買い物に同行してのアドバイスも人気だ。

■理論や体系がしっかりした信用できるスキル

2011年の秋からベーシックコースを受講した宮崎さんは「衝撃を受けた」という。なんとなくその人に合うカラーといった曖昧なものではなく、しっかりとした理論と体系があり、想像していた以上に価値を感じ、前職秘書という宮崎さんの冷静な目で見て、信用できるスキルだと確信した。

「学んで楽しいし、発見があるし、いつも笑顔でいられました。身につけた知識や技術は自分を美しく磨くことにも役立ちます。これを仕事にできたら素敵だなと感じていたので、ベーシックコース修了後、迷わずプロ養成コースに進みました」

宮崎さんは、プロ養成コースのすべての講座を受講・修了した最初の生徒となった。また、イメージプロデュース協会の代表理事で、講座の講師でもあった工藤亮子さんの人柄に惹かれたこともあり、12年春からはアシスタントとして、企業のセミナー、大学生の就活支援、テレビの収録などを補佐しながら経験を積んでいた。

■人を輝かせることで自分も磨かれる

13年からは、バレンタインデーに合わせた「ピンクセミナー」や協会主催の「魅惑」で講師を務める。魅惑は、自分のカラー、骨格、メイク、ファッション、髪型などを見直して、自分がなりたいたい魅力的なイメージに近づける講座で、現在も続いている。

コンサルタントとしては、ショッピングクルーズ（効率的に自分に似合う服を購入し、着回しのアドバイスなどを受ける）や、プロフィール写真撮影用のコーディネートなどを多く依頼されている。

「人を笑顔にできる素敵なお仕事なので、人の力になりたい方にはおすすめです。外見だけではなく、相手の内面とも向き合って魅力を引き出します。悩んでいた人が前向きにポジティブに変ってくれる良いアドバイスができたときは、充実感を得られます。人を輝かせることで自分も磨かれるので、自分もどんどん魅力アップしますよ」